

随 想

第64回日本泌尿器科学会総会にあたって

岡 元 健 一 郎*

1976(昭和51)年4月6, 7, 8日の3日間鹿児島市で上記総会を開催することになりました。開催地と会長が決まるのは学会の慣行により2年前の総会においてであります。したがって1974年、赤坂 裕教授会長の第62回、東京における学会総会で不肖たくしに開催方の依頼があったわけであります。なにぶん辺鄙な地方の大学でお引受けすることに躊躇したのですが、考え直してみますと私自身は永年学会でみなさんにお世話になっています。私が鹿児島県立医専の皮膚泌尿器科に赴任したのは1946(昭和21)年5月でありまして、そのご県立医専は県立医大、県立大学医学部となり、1958(昭和33)年に国立鹿児島大学に移管されました。皮膚科、泌尿器科の分離独立は1965(昭和40)年におこなわれて現在に至っていますが、思えば永いあいだ学会総会ではみなさんのご厄介にばかりなっていたわけです。総会開催を一度ぐらい引受けろといわれるのも無理はないことで、ご恩返しをせねばならないだろうという気持ちでお引受けしたわけであります。

ご恩返しといっても所詮、場所が田舎のことで何の珍しいものもないところだし、南国の風光と桜島の雄姿が参会者をおなぐさめするとしても会員のご要望に沿えるような学会の主題の選択についてはいろいろ頭を悩ませました。学会の構成には計画されたものと、時代の流れに従う会員の演題によりおのずから構成されるものの二通りがあるように思われます。後者の道を選ぶのも一つの方法であり、その方法で主題を計画する主題公募形式もあるようです。これは両者の折衷形式ともいえましょう。総会をおおせつかってから20年来の本総会における宿題報告、会長講演、招請講演、教育講演、特別講演、シンポジウム、パネルディスカッション、研究会などの主題を集めてみました。それをずっと見てゆきますと、そのすべてが、その時どきの泌尿器科の当面解決を要望されている問題、新しく開発された検査、治療法、関連領域の発展にともなって泌尿器科の将来に直結する問題でありまして、会長諸先輩の炯眼とご苦心にいまさらながら敬意を表したいであります。したがって一般講演以外のこれらの特殊講演、討議が総会の主題をなしていたといっても過言ではないと思います。

来年の総会にあたってこれらの特殊講演、討議を

主題にしてこれに一般演題、示説演題をアレンジすることができれば形ができるだろうと考えました。すると主題の選択にいつそう迷う仕末になり、公募も一つの方法だとは思いましたが煩雑をさけるため思い切ってこちらで決めさせていただいて、講演者、司会者をお願いし、討議の内容、演者のご依頼についてはすべて司会者をお願いしたしで、少々厚かましく身勝手なやり方で申しわけなく思っていますが、さいわいに講演者、司会者、演者の方がたも心よくお引受けくださってありがたく思っています。

この雑誌が刊行されるころにはすでにプログラムが会員各位のお手もとにあるはずで、内容はご承知いただいたと思います。これらの特殊講演、討議を中心にして、一般演題、示説演題をアレンジしてみますと不思議に日程のなかにうまく納まってゆくのに驚いたしです。一つにはこれらの主題を日泌尿会誌に予告掲載しましたために、会員各位がご協力くださって関連演題が多く集まったものと思います。改めて会員各位にお礼申し上げたいと思います。

つぎに苦心しますことは学会の期間の問題です。第50回以降ほとんど3日間で2日間の学会は4回あっただけです。第61回は2会場でおこなわれ、さらに早朝あるいは夕食後に教育講演、研究会がもたれた場合もあります。これも学会会員の増加、関連分野の拡大のためで斯学のためにはまことに喜ばしいことでありますが、参加会員の負担を考えればこれぐらいの期間が限度のようにも思われます。

3日間の会期内で特殊講演を別にして一般演題を口演とすると一会場ではどうしても90～95題しか消化できません。一方、会員の増加と研究分野の拡大にともなって出題数は増加してくるというジレンマがあります。1975(昭和50)年の岡山市の総会では新島会長の創意により示説発表を加え、2会場として156題を消化されました。3日間の会期、口演会場一カ所ではこの方法によらざるをえないと思われます。そして示説発表を口演発表と同等あるいはある面ではより有利な発表形成として会員各位に歓迎されるような学会形式を作ってゆくことも一つの方法でしょう。こんどの総会も示説を採用して155題を消化することができそうですが、ご期待に沿える形式であるかどうかご批判をいただきたいと思います。

* 鹿児島大学医学部教授(泌尿器科学)